

れきしみち

- 企画展「安城の文化財—モノ語り名品展V—」
- 松平シンポジウム報告（2月開催）
- 連載「懐かしの写真 昔ものがたり」
- 安祥文化のさとではたらく人々、昭和の名作シネマ
- イベント紹介、市民ギャラリーよりお知らせ

2018.4
No.108

れきしみち

No.108

平成30年4月発行

編集・発行 安城市歴史博物館

指定管理者：安祥文化のさと地域連携共同体

安城市歴史博物館 / 〒446-0026 愛知県安城市安城町城堀30番地 TEL: 0566-77-6655



Sakura



Kayo taishi



石川丈山像



Maruneki box



Human face earthenware

特集：安城の文化財—モノ語り名品展V—

写真中央：聖徳太子馬上像（松韻寺蔵）



旧東海道里町野池付近（里町内会蔵）



Tampopo



安城市
歴史博物館
Anjo city Museum of History

安城市歴史博物館の4～6月のイベント

体験講座

●三河仏壇伝統工芸士の技に学ぶ

「金箔を体験」
〔日時〕5月26日(土) 10:00～12:00
〔講師〕中根英治氏、加藤隆氏

「彫金を体験」
〔日時〕6月2日(土) 10:00～12:00
〔講師〕小林敏広氏、村井義幸氏

「蒔絵を体験」
〔日時〕6月9日(土) 10:00～12:00
〔講師〕村井雅樹氏、清水延一氏
〔定員〕20名(先着順)※各回共通
〔参加費〕800円 ※各回共通

入門講座

●古文書から見る村のくらし(全6回)

〔日時〕各日とも土曜 13:30～
①4月14日「ご領主様に差上げた村明細帳」
②5月12日「こんなにあった村のお仕事」
③6月9日「お年貢はこうして納めた」
④7月14日「引越しの時はどうしたの」
⑤8月11日「村の事件簿『りと水死』」
⑥9月8日「村の争い、お奉行所様に訴える」
〔定員〕30名(先着順)
〔受講料〕500円
〔講師〕高山忠士氏(本館前館長)

連続講座

●古文書手ほどき(全8回)

〔日時〕各日とも土曜 10:00～
①4月14日 ②4月28日 ③5月12日
④5月26日 ⑤6月9日 ⑥6月23日
⑦7月14日 ⑧7月28日
〔定員〕15名(先着順)
〔資料代〕1,000円
〔講師〕三島一信(本館学芸員)

講座の申込み、問合せ

電話にて申し込み受付を行います。各講座の申込開始日を確認の上、お申し込み下さい。
〔申込み・問合せ〕安城市歴史博物館 ☎ 0566-77-6655

歴博演芸場

●龍蓮の奏(りゅうれんのかなで)

〔日時〕5月20日(日) 14:00～
〔出演〕NEO Japanese
(和洋楽器混成ユニット)
〔場所〕安祥城址公園
※申込不要



●鎧の試着会

〔日時〕5月5日(土) 10:00～15:00
〔場所〕歴史博物館エントランスホール
※申込不要



国際博物館の日(5月18日)
にちなみ常設展観覧料が
無料となります。

安城市民ギャラリーよりお知らせ

市民ギャラリー開館15周年記念企画展
アーティスト活動20周年・セロテープ®誕生70周年記念
「瀬畑亮 セロテープアート®展2018 in 安城」

独自の技法を使い、セロテープ®を巻き付けた動物や植物などの立体作品をはじめ、創造性豊かなインスタレーションなど、新進気鋭の現代作家の夢のある世界をお楽しみいただけます。
〔開催期間〕平成30年6月9日(土)～7月7日(土)
〔観覧料〕200円(中学生以下無料)
〔休館日〕6月25日(月)・7月2日(月)



瀬畑亮(セロフワーオリジナル「未完の花」)

安祥文化のさと

安祥文化のさととは安城市にある松平氏四代50年の居城跡を整備した安祥城址公園一帯の名称です
〔全館共通事項〕
住所 / 〒446-0026 愛知県安城市安城町城堀30番地
休館日 / 毎週月曜日(祝日の場合は開館)、年末年始(12/28-1/4)
URL / <http://ansyobunka.jp/> 安城市歴史博物館

安城市歴史博物館
開館時間 / AM9:00～PM5:00
TEL: 0566-77-6655 FAX: 0566-77-6600

安城市民ギャラリー
開館時間 / AM9:00～PM5:00
TEL: 0566-77-6853 FAX: 0566-77-4491

安城市埋蔵文化財センター
開館時間 / AM9:00～PM5:00
TEL: 0566-77-4490 FAX: 0566-77-4491

安祥公民館
開館時間 / AM9:00～PM9:00
TEL: 0566-77-5070 FAX: 0566-77-6062



安城の文化財

モノ語り名品展V

安城市には、安城の歴史・学術上・芸術上において高い価値を有する資料があり、国や県、市がそれぞれ指定した文化財があわせて二二七件あります。平成30年2月末現在。

その多くは所有者や安城市歴史博物館などで大切に保管されており、普段はなかなか目に触れることがありません。

日頃一般に公開する機会が少ない安城市内の指定文化財を紹介する企画展「安城の文化財―モノ語り名品展―」も、平成25年度から始まり今回で五回目の最終回となります。

今回の企画展は「聖徳太子馬上像をはじめとする仏教美術や絵馬、寺領麻子の瓦や中世陶器などの考古資料、三万歳関連の民俗資料のほか、文人・石川丈山関連資料や市内の史跡などをパネルで紹介し、また平成29年度新たに指定された文化財や館蔵資料もあわせて展示します。

仏教美術

仏教が日本に伝わり人々の間で信仰が広がる中で、教団としての礼拝の対象、法要儀式や思想信仰を理解するための様々な品が必要になってきました。その品々が作製される過程で彫刻・絵画・工芸・建築などの諸部門にわたって仏教独自の造形美術が花開くこととなります。それらは当然ながら安城市内の寺院にも伝わっており、国・県あるいは市の

文化財として数多くの仏教美術作品が指定されています。

今回展示する松韻寺(寺領町)の聖徳太子馬上像(以下、馬上像)もその一つです。

この馬上像は、江戸時代に作られた木彫りの像で白馬にまたがる重形の聖徳太子(以下、太子)が全身極彩色に塗られています。この馬上像は全国でも一点しか類例がない珍しいものです。この像には松韻寺に伝わるあるエピソードがあります。

それは太子が蝦夷征伐、蝦夷鎮撫に参加した際の話です。太子一〇歳の時(五八一年)、大和の国に蝦夷の軍勢が侵攻してきます。そこで太子は蘇我馬子を伴い蝦夷の陣まき赴きます。蝦夷軍の副将軍は高い峰から大岩を太子めがけて投げつけます。太子はこれを金の鞭で高さ一丈約三メートルほどに七回打ち上げて、西の方角へ投げました。すると大岩は雷のような音を立てて三つに割れ、一つは奥州三股砂摩にもう一つは播磨の国投石の浦に、さらにもう一つは三河の国の岩根又は岩根(へ落ちたとされています。松韻寺の境内には、この岩根に落ちた岩が現在もまつられています。

この太子が岩を砕いたというお話は、江戸時代に作られたこの馬上像に関する書物の中でも紹介されており、三河の国岩根に太子の砕いた岩が落ちたというお話はよく知られていたようです。

平成30年
4/7(土)
-7/1(日)

観覧無料

【前期】4/7(土)~5/20(日)
【後期】5/22(火)~7/1(日)

※会期中、一部作品の展示替えを行います。
文責：石川貴信

松韻寺の像は、蝦夷征伐時の太子が金の鞭を振り上げてはる姿をあらわしたもので、その隣で馬を引くのは召使の調子丸です。

松韻寺には馬上像のほかに、「聖徳太子給伝(全四幅)があり、製作年代は江戸時代末期頃と思われる。その第一幅には蝦夷が大岩を担ぎ上げ今まさに太子にかけようとする場面が描かれています。



聖徳太子給伝 第一幅 蝦夷鎮撫の場面 (松韻寺蔵)

絵馬・奉納された人々の想い

皆さんも神社で願いを書いた絵馬を奉納したことがあるのではないのでしょうか。絵馬を神社に奉納する風習は、古くは生きを馬を神に奉納することから始まりました。これは馬が神に近い存在であったから。しかし、馬を献上することができない者は馬形や馬の絵を板に描いたものを奉納するようになりました。そして次第に自分の願いをかなえるためや、その願



聖徳太子馬上像 (松韻寺蔵)

特別展関連行事

- 記念講演会
 - 「石川丈山の姿―生涯とその芸術―思想など」
 - 【日時】4月15日(日)14時
 - 【講師】三島徹氏(東洋文化振興会会長)
 - 【定員】80名(先着順)
 - 【申込】不要
- 記念講演会
 - 「三河大浜騒動をめぐって―幽囚日誌を中心に―」
 - 【日時】5月6日(日)14時
 - 【講師】安藤弥氏(同朋大学教授)
 - 【定員】80名(先着順)
 - 【申込】不要
- 座談会
 - 「再発見!安城の文化財」
 - 【日時】5月16日(土)14時
 - 【講師】石川貴信(本館学芸員)
 - 【定員】80名(先着順)
 - 【申込】不要

紹介・新指定文化財

平成29年度は新たに「飛天像(神光寺蔵)・幽囚日誌(誓願寺蔵)・相撲土俵四本柱(神光寺蔵)・相撲土俵四本柱(若一王子社蔵)の四件が安城市の文化財に指定されました。今回の企画展では、この中で「飛天像」と「幽囚日誌」を展示し、二つの「相撲土俵四本柱」は写真パネルで紹介し。

「飛天像」は平安時代後期の作製と推定される仏像です。もともとは単独の像ではなく雲中供養菩薩像または光背飛天などの群像として取り付けられていた像の一つと考えられます。

「幽囚日誌」は大浜騒動(鶯塚騒動)または菊間藩事件の主唱者である石川台嶺(一八四三〜一八七二)が獄中で書いた日誌です。大浜騒動とは東本願寺下の寺院と門徒たちが、明治政府が神道国教化のために諸法令を出した影響によって、廃仏毀釈が展開されたこととキリスト教浸透に対する危機感を持ち、政府の政策を推し進める菊間藩大浜出張所(若南市)に向かい、話し合いが膠着するうちに役人の一人を殺害し、その後事件の中心人物である台嶺らが逮捕・処刑されたというものです。

「幽囚日誌」には台嶺の自筆で、獄舎での生活儀や一族門徒との通信のほかに役人の尋問と応答が詳細に記録されています。



「幽囚日誌(石川台嶺日記)」(誓願寺蔵)



飛天像(神光寺蔵)

- 体験講座
 - 「安城の巨樹名木をめぐる―安城北部編―」
 - 【日時】5月3日(木)・祝
 - 9時30分〜15時
 - 【ガイド】福田英夫氏(安城市博物館協議会副会長)
 - 【定員】18名(先着順)
 - 【料金】1,000円
 - 【申込】4月20日(金)9時よりお電話でお申し込み下さい。
 - 体験講座申込先 (安城市歴史博物館) 0566-776655

めぐるめぐる史跡をめぐる

史跡とは歴史上の各時代に営まれた人の活動にともなう文化的遺産のことで、遺跡とも呼ばれます。皆さんが思い浮かべられるものとしては、古墳や貝塚、城跡などがあるでしょう。今まで開催されてきた「安城の文化財展」においても、それらの史跡を紹介しました。

今回の展示では、今までご紹介できなかった墓碑やお寺の跡、井戸跡などの史跡を写真パネルで皆さんにお見せします。

ここでは、史跡のなかで「本多忠高墓碑」と「本多忠豊墓碑」の二つについて紹介します。本多忠高墓碑は歴史博物館に隣接する安城城の跡現在の、



神明社・小河天神社合殿の絵馬(神明社・小河天神社蔵)

江戶時代の半官以降になると大きな絵馬(大絵馬)の奉納が盛んになりますが、経済的にあまり余裕のない庶民が大絵馬を奉納する際には、氏子仲間や村の講などの複数が奉納することがよくありました。

今回展示する神明社・小河天神社合殿の絵馬も江戶時代の後期、文政一年(一八二八)に奉納されたもので、表面に下木邑(若者中)と墨書があり下木村の若者たち二九名によって奉納されたことがわかっています。

横幅は市内最大となる二・八メートルあります。



本多忠高墓碑

雲院(大乗寺)北側、道路と隣接した墓地の中にある、ひとさ大きな墓碑です。これは天文一八年(一五四九)に徳川家康の父松平広忠が織田家臣佐久間氏の放った刺客によって暗殺されると、太原崇字(雪意)を総大将とする今川軍が松平家臣にも号令をせし織田信長の守る安城城に攻撃を仕掛けた。その際に城の三の丸に参り込み死しましたと伝えられるのが本多忠高(多忠勝)の父です。

寛政九年(一七九七)に岡崎藩主の本多忠頼が二五〇年忌を営み、忠高戦死の場所に墓碑を建てました。墓碑の台石は亀首となっていますが、これは亀趺と呼ばれるものです。

本多忠高墓碑のほかに亀趺のある墓碑が安城町赤塚地内にも一つあります。それは寛政六年(一七九四)に同じ本多忠頼によって建立された本多忠豊墓碑です。本多忠豊は先に記した本多忠高の父です。天文一四年(一五四五)に松平広忠が安城城を攻撃しました。この戦いは安城清暇の合戦と呼ばれており、「譜牒余録」には広忠が織田軍の籠もる安城城を包囲しましたが、その戦いの最中に広忠が織田軍に挟まれ窮地に陥ります。その時、忠豊は広忠の扇の馬印を受け取って敵を欺き、安城城で戦死したので、広忠は無事退却できたことが記されています。この話は、十七世紀以降に本多家において先祖を語るなかで創作された物語と言えますが、松平家に忠節を尽くした先祖の英雄的な活躍が本多家に代々伝わっていたことが、この墓碑に刻まれた碑文によってわかります。



はじめに

平成三十年二月十一日の日曜日、歴史博物館エントランスホールにおいて、第8回松平シンポジウム「信長御在世の時の如く―織田体制の中の家康―」を開催しました。
タイトルは(天正十一年)十月二十八日、徳川家書状写にある「信長御在世時之節、惣無事无候事」と同じ言葉です。家康が水谷勝俊に對して、以信長が戦勝を命じたように、水谷の主人の結城朝朝に北条氏の侵襲を懸念するよと述べたものです。武氏滅亡時、すでに信長にまで信の継承が影響を及ぼすことが行なわれ、その結果、家康が継承し、織田体制の員として東国方面に継承を求めていたことと、秀吉との緊密関係の中で後方の東国を静穏にする必要があったこととなり、当時の複雑な関係を示した言葉といえます。
今日は天正十一年(一五六八)の本能寺の変後、清須会議を経て織田体制といわれる信長後継者を戴いた徳川の幕府による政権が如何に展開し、消滅していったか、またその中で家康の位置づけについて天正十一年四月に起きた小牧・長久手の戦いの時期を対照的にシンポジウムを行います。



播磨良紀氏
中京大学教授

学教授の播磨良紀氏、パネリストには谷口氏(首都大学東京教授)、柴裕之氏(東洋大学講師)、萩原大輔氏(富山市郷土博物館学芸員)を迎え、基調報告として討論という形でシンポジウムが進められました。

第8回 松平シンポジウム
信長御在世の時の如く
―織田体制の中の家康―

水軍を使った戦いが展開していた。
信濃では、家康方の依田信蕃が佐久郡に配置され、孤軍奮闘している中、北条方から離反があらわれ、最初に天正十年八月に木曾義昌そして真田幸吉が寝返り、家康の苦境は好転していく。家康は北条と敵対する北関東の佐竹、宇都宮、結城なども手を結び、対北条戦を展開していく。

また、家康は織田側から援軍を求め、織田の戦争という形に持っていた。しかし、秀吉と柴田の対立という織田内部の政争の中、援軍の派遣は不可能となり、家康と北条との和議が求められた。
天正十一年の乱は、十月二十九日成立の家康と北条との和議により終結した。それと同時に家康は、北関東の大名・國衆へ惣無事を求めた。家康は甲斐、信濃に勢力を築くだけでなく、関東でも影響力を持つ存在にならなければならない。関東、東北方面の問題が徳川家康に委ねられるという状況となる。

家康の新領国の首魁は武田の時の郡代という独立してその地域の運営を委ねるという方式を踏襲した。天正十一年四月には、真田、保科、小笠原、信濃國の國衆が甲斐にいる家康の元へ出陣した。
天正十一年の八月には家康の次女徳姫が北条の当主の氏直に嫁ぎ、関係を強化していくが、それが北条と対立していた北関東國衆の信頼を失くしてしまふという事態になった。つまり、関東惣無事は後退する事態となる。
天正十一年四月の賤ヶ岳の戦い後、秀吉が白頭し、合戦の際に家康、上杉と手を結んでいこうと、秀吉は直接関与と関係を持ちたいという動きを見せる。佐竹等に対して秀吉は信長在世のあり方を求めること共、家康に對しては早く関東惣無事を取りよめさせる事を指示し、関東の問題に終った。
家康は主君としてこの時織田信雄を立てていて、秀吉と信雄の対立の中で、信雄と手を結んで孝兵衛するに至り、小牧・長久手の合戦となった。これに、関東の問題や信濃の問題を絡み、信雄・家康と北条に對する秀吉派には上杉、佐竹等の北関東の大名や國衆がいる。さらに徳川家康では頼りにならぬと思つた信濃の國衆の木曾・真田、小笠原が加わってくる。信濃の問題や



萩原大輔氏
富山市郷土博物館学芸員

織田体制の中の家康の動向
佐々成政と徳川家康
佐々成政は、尾張国比良の出身で、生年は二説あり定かでない。信の親類の馬廻衆の中で選抜された母衣衆の筆頭であった。長條の戦いの功績により、越前国小丸城を与えられ、柴田勝家の目付け役として不破光治、前田利家と共に「府中三人衆」と呼ばれる存在であった。
本能寺の変当時、柴田は上杉方の魚津城を攻め、六月三日に陥落させた。ところが六月六日、本能寺の変の報が北陸に届くと、越中国中が上杉方へ転じた。成政は、越中に残り、上杉軍を撃退する役割を与えられた。また、天正十一年四月の賤ヶ岳の戦い時、目前で戦っている上杉が早く秀吉に同盟していかせようとして、半ば強制的に反秀吉方となり、上杉に流れてしまった。成政は秀吉に、合戦後、成政は太胆にも秀吉の金沢城に直接乗り込んで、議判に及んで和睦に成功、秀吉から咎めな四月二十八日に越中国の大名として続いていく。

天正十三年四月の小牧・長久手の戦いで成政は、始めは秀吉の動きを、八月ごろに徳川家康から誘いがあつたらしく、その結果、信雄側へ転じていく。九月には秀吉方の加賀の前田を急襲し、大敗した。十一月十三日に織田信雄が秀吉と単独で和議十二月には家康と秀吉に、實の於義伊を出して、成政はまた秀吉と講和をする。そのうち、十二月に成政は越中から信濃を通り浜松まで北上し、越えを断行し、家康と秀吉が講和したといえ、成政と家康の軍事連携の継続の確認、織田信雄はもう一度秀吉に對し孝兵衛を促



谷口 央氏
首都大学東京教授

「清須会議以降の羽柴秀吉と織田家団との関係について」
清須会議とは、天正十年六月に織田家の宿老の柴田勝家・丹羽長秀・池田恒興・羽柴秀吉が織田家の後継を定めた会議のこと、信長の息子の信雄・信孝が名代を争つたため、会議から外して行われ、信長の孫にあつた三法師を織田家当主とした。通説では、秀吉が柴田の推した信孝を退けて三法師の後継者とし、清須会議時、秀吉と柴田は敵対関係だつたとされている。しかし、すでに織田の当主は信長の息子の信忠であり、信雄は北信家、信孝は神戶家の養子となつて、本能寺の変で、信長・信忠が亡くなつたので、孫の三法師が後継者として選ばれているのは妥当である。会議では四人の宿老による合議であつたが、後の史料に、信雄・信孝・家康から誓紙をとる手続きをしていこうと、家康も宿老の一員であつた。

また、清須会議では、宿老と信雄・信孝の領地が定められたが、新たな問題が出てきた。信雄領の尾張と信孝領の美濃の國境が木曾川等の流路変更で変化していたため、流路変更前の國境と、現在の川を境とする川切とするか、信雄・信孝が対立していた。この時秀吉は信孝を支持し、柴田は信雄を支持していた。そして、秀吉は三法師が岐阜城にいたため、後継者として本地地の安土城を完成させることを急務としていた。この段階で秀吉は、柴田・信孝とは敵対関係ではなかつた。
秀吉と柴田の対立は天正十年十月に行われた京

すといふことを求めたのであつた。
秀吉にとっては、成政と家康が組むことは克服すべき課題であつた。秀吉が家康に、成政と組んでいこうとを口実に、人提出を詰めて、奇巧なのが、天正十三年六月の段階で秀吉と家康が断たつたのが、後の動向から見ると、実際八月に秀吉が七万人の大軍を率いて成政の居城山攻めした。これ秀吉が関白になって初めに行つた軍事行動で、その大將に織田信雄があつた。ちょうどこの時、家康は真田を攻め、第一次上田合戦が行われ、上杉が信濃に孝兵衛をしなければならぬ限り、結果的に大局的には家康の行動が成政の側面支援といふ意味合いがあつたのではない。
成政の降参後の十月には、秀吉は家康に無条件に入質を求めた。一方的な入質追加を強制要求する事で、天下人秀吉の自己意識、政治的圧力というものが徳川家中にも分裂を起し、具体的には石川数正の出奔事件が挙げられる。

織田体制が終焉、解体に向つていく中で、家康自身も秀吉政権へ参加するのかが、はたまた徹底抵抗するのかがという選択に迫られていたといふ風になるではないか。
三者の報告後討論を行います。論点として、①天正十年九月から十月あたりの織田体制の変化、②織田体制の中の家康の位置づけ、③信死後家康が織田に従つたのか、④織田体制の終焉について、パネリストから意見が交わされました。
①について、柴氏は家康への援軍を送る状況が無くなったことで、織田体制の中断が見られ、それによって家康と北条氏の和議の流れに全た、萩原氏は、成政は基本的には越後の上杉と全面対決中で、中央政権との関わりがみられないといふ。
②について、柴氏は、家康の信康と信長の娘五徳が夫婦であつたことから、信長の嫡孫大名という立場であつたこととした。
③について、谷口氏は、織田という大勢力の中で、離反することは得策とは考えられない。柴氏は徳川

シンポジウム

都の紫野大徳寺での信長葬儀からである。秀吉の養子御次(次子、羽柴秀勝)を喪主に立てた事で、この行動は九月九日に遡る。最終的に敵対関係となったのは、十月二十八日に信孝・柴田が謀反を起こしたため、信孝が岐阜城に籠つた三法師を退けて、秀吉・丹羽・池田の三宿老が話し合つて信雄を当主に選んだ事である。十一月一日に秀吉一家に、それを伝え、後に家康は信雄を家督として認めた。つまり秀吉による柴田外しが始まつたのは九月の頃で、実際に十月十五日の信長葬儀でもうほぼ確定的になつたといえる。

柴報告



柴 裕之氏
東洋大学講師

「徳川家康の五カ國領有と関東関係」
天正十一年の乱とその後―
天正十一年の乱を中心とすると、武田氏滅亡後、関東から南奥羽にかけて、従軍一統といわれる状況が出現した。家康は織田・徳川の大目として、伊賀越えで領國に戻つてから織田領頭甲斐・信濃の思乱を鎮める行動に出た。その際は秀吉から平定の手承を取りつけている。同じ頃、信濃から甲斐にかけて侵襲していた北条氏も、甲斐・中野の黒駒で北条を撃破するなどして不利な状況の中、対峙を続けていく。北条との戦いは駿河国でも起きていて、三島、沼津の辺りの河東郡

の発展を支えたのは織田である。萩原氏は織田の親類大名としての存在、そして三者とも織田の中に入るといふことが当然としてしまつた。
別に家康の第一次上田合戦が成政との関係があるとの見方について、谷口氏からは、新たな視点として評価を、家康を裏切つた真田を攻めるといふ大義名分が本来の要因とした。
④について、谷口氏は「宿老体制」という言葉で表現するように、小牧・長久手の戦いで、秀吉の優位性は認めつつもこの体制が壊れていない状況で、織田体制の崩壊は家康の上洛時である。柴氏は秀吉と信雄の関係が逆転した時で、官位で秀吉が内大臣、信雄が大納言となつた頃、萩原氏は信雄の従属が画期で、天正十三年二月の信雄の上洛と秀吉への拜謁であつた、とした。

聴講者の質問として、天正十一年六月の信長一周忌葬儀の信雄不在について、谷口氏は、信雄はこの段階で安土から伊勢長島に移つていて、そもそも信雄が出席できる状態ではなかつたといふ。また、宿老丹羽長秀の立場については、秀吉に事実上従つていて、あるいは秀吉がそのよう意識していたといふ。柴氏は賤ヶ岳の戦い後に、丹羽は越前を秀吉から宛行われていることだから配下のと考えられるとした。
その他、成政の富山での人気原因、家康の伊賀越えについて、史料差出人の家康の取次としての立場について、史料差出人の連署の順番についてなど、専門的な質問が多くなされた。

会場の平野明氏(氏)國學院大学兼任講師は、三者の報告から、織田の縛りの中で、家康の活動であることは共通していふこととして、小牧・長久手の戦いあたりには家康は織田体制からの脱却を謀つていふのではないかとした。また、織田体制の中の家康の立場では、谷口氏に宿老体制に含まれていふとされる立場の再考が必要でないかと指摘された。最後に、当館館長から、来年度の特別展「家康を支えた三河石川一族」とそれにあわせて次回シンポジウムを開催すると述べ、大歓迎の中シンポジウムを終えました。

第4回 懐かしの写真 昔ものがたり

文責：岩崎正樹(安城市歴史博物館 館長)



写真① 旧東海道里町野池付近(里町内会蔵)

市の北部に亭々と空をつく松並木が続く道があります。昔に比べればすいぶん松の数が少なくなりましたが、旧東海道のありかを知る標識のようになっています。現在、安城市域の旧東海道約五キロメートル間に、二〇本の松並木の指定を受けています。写真②は現在の東栄町五丁目付近の旧東海道を撮影したもので、松が歩道に植えられています。道路は舗装され、自動車がひっきりなしに通るため、松の木にとってはあまり良い環境とはいえませんが、今本・東栄町内会が清掃活動等を行うなど、保護に努めています。

この松並木が整備されたのは徳川家康の指示によるものです。家康は関ヶ原の戦い後、兵馬の権を掌握し、内政の充実に努力を注ぎました。道路の整備もその一環で、伝馬の制をききました。安城には宿場はできませんでしたが、岡崎宿と池鯉鮒宿の間の街道が柿崎・尾崎・宇頭茶屋・大浜茶屋・里・今の村々を通るようになりました。そして街道の施設の一つとして、松並木が幕府の命で整備されていきました。写真①は昭和一〇年代の里町野池現里町

四丁目付近を写したもので、江戸時代の街道の面影が残っています。道路の両側に土盛りが造られ、そこに松が植えられています。江戸時代の記録によれば、五街道の一つ東海道は大海道であり、道幅が六間(約一〇・八メートル)とされていました。実際には場所によって狭いところもありました。(尾崎村では四間でした)また、街道の両脇の並木敷地の間数も定めはありませんでしたが、「九尺(約二・七メートル)が目安で実際には決めがたい」とされています。歩行道が、間馬道でも二間であった当時としてはとても広い道といえるでしょう。

街道はいつもきれいな状態にされていました。安永四年(一七七六)に、オランダ商館長と一緒に来日したスウェーデン人のシュンペリは、「江戸参府随行記」で「道幅は広く、かつ極めて保存状態は良い」と記述しています。掃除丁場という、掃除の担当場所を近隣の村々にあてがい、竹ぼうきや草ぼうきでの掃除が行われ、簡単な道路の補修は、ふるはしなどを用いて村人たちが行っていました。また、並木の松は立ち枯れの伐採や大風による倒

木の処理などには、そのつと役人の見分を必要とし、勝手に処分することは禁止されていました。このようにして幕府の監督下において整備に気を遣っていました。

岡崎宿と池鯉鮒宿の間には、立場と呼ばれる休息所、小休止する場所が二カ所ありました。一つは矢作地内にもう一つが市域にあり、この「宿村大概帳」には岡崎宿より二里五町池鯉鮒宿へ、里四町余りの茶屋村地内宇頭茶屋と記されている所です。太田南政の改元紀行にも「自是東岡崎領自是西福屋領といへる石碑ある所大濱の立場なるべし」とあり、現在の宇頭茶屋町(旧宇頭茶屋村)から浜屋町(旧大浜茶屋村)にさしかかる所にあつたと書かれています。

この大浜茶屋村(宇頭茶屋村)は、問の宿として栄え、茶屋は立場茶屋として発展しています。茶屋は本来休憩するところですが、屋敷や名物のお菓子や果物を食べたりますところでも、止宿や商いは禁止されています。ところが時代が進み経済が発展し、交通量などが増えるようになってくると茶屋でも止宿させたり、商いをしたりするところが出てきました。大名の屋敷みは旅籠ですることにしていたが、茶屋を小休に使う藩が出てきました。大浜茶屋でも元禄二年(一六九八)には紀州藩主松平主税頭松平頼方のちの吉宗が訪れ、以降紀州藩が関札を渡し、休憩場所になりました。また、宝永七年(一七二〇)には長州藩主毛利吉元が参勤交代での帰りに茶屋で昼休みをとっています。

大浜茶屋は大浜街道の交差点でもあつたので、四間に賑わいを見せ、天保一四年(一八四三)の記録では作問茶屋や炒豆茶屋の茶屋商いしている家が三軒ありました。ほかにも米屋・油屋・居酒屋などの街道を往来する旅人相手の経営をしている家が、総家数の半数に近い〇数軒もありました。まさに宿場町に近い活況を呈していました。



写真② 旧東海道東栄町付近

安祥文化のさとして はたらく 人たち 安城市民ギャラリー 「展示監視員」



Q1 どんなお仕事をしていますか？

展示室受付ではお客様に作品目録やチラシをお渡しし、音声ガイドの貸し出しをおこなっています。展示室内ではお客様に対してのご案内、また作品のそばへ保護のための監視業務をおこなっています。

Q2 お仕事の楽しさは？

監視員にふたぎのけは接客が好きで、お客様と身近に接することができるといえる仕事内容に惹かれたからでした。お客様から展示作品の感想をお聞きしたり、他の美術館の展示情報をお聞きしたりすることもあります。作家さんから展示作品の解説や作品づくりの面白さをお聞きできることも仕事の魅力だと思います。

Q3 監視員さんのお仕事に携わってからの変化はありましたか？

個人的に美術館に行くことが増えたりテレビで美術番組を見るようになったり、幅広いジャンルの美術に関心を持つようになったりしました。

Q4 仕事中に心がけていることは？

監視員において、お客様に威圧感を与えないよう表情に気を付けています。椅子に座しているときは姿勢を正し、お客様とお話するときも笑顔で柔らかく話すなど、ギャラリーに合った雰囲気をおこしています。また、お客様に尋ねられたときに答えられるよう、市内の公共施設のイベント情報や近隣の美術館の展示情報もできる限り収集するよう心がけています。

Q5 市民ギャラリーの魅力は？

他市のお客様から安城には良いところがあるねとよく市民ギャラリーを褒めていただきます。ギャラリー3階から見せる安祥城址公園は、四季折々で見せる景色が違い、新緑・紅葉・雪景色と趣が変わります。ギャラリーに越越しの際は、美術作品を楽しむとともに、非日常を味わうことができます。

お客様に展示作品をじっくり鑑賞いただき、気持ち良くギャラリーで過ごしてもらえるよう、監視業務をおこなっているのが監視員さんのお仕事です。

ギャラリーの展示室の監視員さんをご紹介します。

昭和の名作シネマ上映会

月に一度、名作映画を歴博にてご覧ください。

場所 講座室 定員 80名 時間 10:00 ~ 当日参加可能

4/22 1957年 嵐を呼ぶ男
出演 石原裕次郎、北原三枝 時間 100分
美しい兄弟愛を中心に裕次郎が唄って暴れてグッと泣かせる。ドラマ合戦の圧巻は見るものを魅了する。

5/27 1964年 潮騒
出演 吉永小百合、浜田光夫 時間 82分
三島由紀夫原作の同名小説を映画化。伊勢湾小島の美しい自然を背景に、漁師の青年とアワビ獲りの娘との美しい純愛を描く。

6/24 1965年 東京は恋する
出演 舟木一夫、伊藤るり子 時間 95分
美大入学を夢みながら看板屋で働く青年・明夫は、少女に恋をするが、その娘は、高校時代の悪友でプロのパンマンを目指す健次の恋人だった。

7/29 1956年 わが町
出演 辰巳柳太郎、南田洋子 時間 98分
フィリピンに困難な道路建設に従事した男が、人力車をひいて娘と孫娘を育てあげるド根性物語を、明治・大正・昭和にわたって描く。

8/26 1968年 あゝひめゆりの塔
出演 吉永小百合、浜田光夫 時間 127分
沖縄に散った殉国学生 1503 名一特志看護婦として戦火に散った乙女の悲劇を描いた一大青春劇。

9/23 1967年 夜霧よ今夜も有難う
出演 石原裕次郎、浅丘ルリ子 時間 93分
「カサブランカ」を下敷きに、夜霧の横浜を舞台に戦火に散った乙女の悲劇を描いた一大青春劇。